12 月 3 日 Copyright：Takumin

ナポレオンの支配原理について。ナポレオンは人民投票、下からの同意によって自らの正当性を獲得した。彼は将軍であったが、人気が高まると 1804 年に皇帝になった。彼は合理的な言説を重視し、その原型はローマ法に求められる。ナポレオンは田舎貴族であり、フランスの統治者としての正当性を獲得することは非常に難しかった。かなり明確なランク分けがされており、それを超えて統治者になるすべを考え、下からのレジティマシーに依拠することになった。ブルボン家出身でなく、単なる田舎貴族であったため、上からのレジティマシーを勝ち得ることは難しかったからである。彼が下からのレジティマシーを考えたのはフランス革命後である。フランス革命によって人民主権という考えが重要になった。彼は人民主権という合理的な言説を用いて自らの権力を得ようとした。ただ、人々の同意を得るのはそう簡単ではない。人々の支持を獲得するためにはカリスマ性が必要である。しかも、文字が読めない人がいるので別の源泉に依拠せねばならなくなる。彼は戦争によってカリスマ性を高めようとした。当時戦争が行われていたことが彼が有名になった重要な要因である。フランス革命直後、フランスは周辺の君主国から攻撃されていた。今日共和政は当たり前であるが、当時はそんなに多くなかった。基本的に君主制であった。君主制のヨーロッパの中心に共和国ができてしまい、周辺諸国はその思想に脅威を感じた。それが理由でフランス革命批判が行われた。フランスは共和制を守ろうとし、手段として国内の意見を調達すると同時に、外敵から自らを守らねばならなくなり、戦争が始まった。そこで活躍したのがナポレオンである。彼はフランスを守っただけでなく、周辺諸国に遠征した。イタリア遠征後彼は国民的英雄になった。ナポレオンは自分の戦勝をイメージによって人々に訴えようとし、絵や彫刻で表した。彼は自らが homme-peuple（人民を体現する人）であることを訴えた。この言説によって彼は人民主権論を乗っ取った。人民主権はルソーによると全ての市民が政治に参加するモデルとして想像するもので、代表性は認められない。ナポレオンはその言説を意図的に曲解した。人民は代表される存在であると主張した。代表性を擁護したが、単なる代表性でない。シエースは議会中心の代表性を主張したが、ナポレオンは一人の人間が人民を体現すると主張した。どっちもこちらが正しいという確実なロジックが存在するわけではない。例えばアメリカでは上院議員と下院議員は選挙で選ばれるためレジティマシーがある。彼らがそれぞれの議会で法を作り、それが一般意思と認められる。だが、アメリカには大統領もいる。大統領も選挙によって選ばれるので正当性が認められ、議員、大統領共に人民の正当な代表として認められている。ルソーによると個人が契約を結ぶ時に全ての権利を譲渡することが前提条件になる。ただ単に生命と基本的自由を保障されればよいのでなく、ルソーは正義が実現されなければならないと考えていた。どのようにして道徳的な存在になれるかがルソーの課題であった。そのため社会契約論ではただ単に自分の欲望に従って生きるのは欲望の奴隷であり、真の自由とは一般意思を実現することとした。一人の中には二つの意志がある。特殊意思と一般意思と一致する新の意思。後者は自覚されているとは限らないとルソーは主張する。だが、後者が重要で、それを実現することによって社会が正義を実現すると主張した。これは非常に問題視されるモデルである。真の意思と虚偽の意思があれば前者を求める。自分が真の意思を実現できない場合は第三者に任せればいい。問題は、第三者が一般意思を作り、

それを強制することである。常識的に考えると強制と自由は対立概念であるが、自由を強制することは可能であるとルソーは先ほどの前提からロジカルに説明した。ルソーは全体主義を擁護したわけではない。彼はフランス革命を経験していない。よって彼は革命を経験したわけでも主張したわけでもない。その後の恐怖政治を擁護したわけでもない。よって全体主義がルソーの名において主張した論理は曲解されたルソー主義的論理である。思想や理論はどれだけ合理的であっても一つの帰結をもたらすものではなく、操作が可能なものである。ルソーは実は平和主義者であったし、全体主義的なロジックを嫌っていた。故に大きな国ではルソーの論理は実現不可能であると考えていた。それが可能なのはスイスとコロシカだけだとルソーが主張したことは前回の授業で述べている。ところがジャクバンはフランスで曲解して用いた。全員が参加せねばならないということをまず曲解した。人民の代表者が人民に代わって法律を作るシステムを認めることを主張した。代議制民主主義の理論を虚偽意識のロジックと接合すると大変なことになる。なぜなら代議士は個人の真の意思が何かを決めることができるからであり、その意志を一般意思の名において強制することが可能になるからである。少数派エリートの代表者が人民の名において実際の国民に対して自由を強制するということになる。強制することで自由になれるのだからいいことだということになる。一番最初に社会を作るときに全ての個人は次のように約束する。社会が一般形成化されると、それ以後はマジョリティールールで政治がおこなわれる。（全会一致）そのマジョリティーが法を強制することができ、そのことによって人々は自由になる。このロジックを認めた場合、権力のあるいは主権の制限という考えが出てこなくなる。ルソーのモデルは要するに一般意思は正義を意味している。例えば人格者がいるとしてその人はいいことをしたいという意志を持っていたとし、その意志を制限することはできない。正義は制限するものでないというもの。アングロサクソン系のロジックよりもしっかりしている。モンテスキューは個人の自由を非常に重視した。彼はいいものも無制限的であってはならないとはっきりと主張した。政治の領域においてはいいものも制限せねばならないのがリベラリズムである。なぜそうなるかというと、リベラリズムは自由試技であるが、それが徹頭徹尾権力に対して警戒する。ある意味では人間に対して否定的な見方をする理論。そのため、政治権力を警戒する。権力が集中すると必ず腐敗するという信念がこの理論にはある。だからいいものであろうとなかろうと必ず権力の集中は防がねばならないと彼は主張した。ルソーあるいは人民主権は人間がいいか悪いかは一概には言えないが、いい社会が存在していればその中で人間はよくなるであろうという考え方を持つ。人間はよくなれるという理想主義的な考え方。理想的過ぎて政治の論理によって逆に翻弄されていった。つまりみんなでいい社会を作れるし、いいものは制限されるべきでないというのは理論としては正しいが現実に当てはめるととんでもないことになり、それが政治の不思議な点である。政治の場合は矛盾の含まれる理論からまともな状況が生まれることがある。これを最初に主張したのはマキャベリーである。つまり、政治の世界においては善から悪が、悪から善が生じることがある。アングロサクソン系のロジックはだれが最終的な決定者か分からず、まずい点があるが、なぜか個人の意思が最も尊重されている。モンテスキューは社会学的なアプローチでそれを説明しようとした。要するに理論手現実との相関関係を分析するというアプローチである。ルソー主義者は矛盾を嫌い、人間にポジティブな評価を

しているため、正しい権力が権力を一手に握ることを主張しているのだ。大陸系では抵抗権がなく、アングロサクソン系では認められる。大陸では正しい社会ならば抵抗する必要がないと述べる。この理論が悪用されることによって全体主義になる。この論理をさらに曲解したのがナポレオンである。ナポレオンという個人が一般意思、正義、フランスを体現しているとした。さらには人類の意思を体現しているとも主張した。そうした考えを肯定したのがヘーゲルというドイツ人である。彼はナポレオンが侵入してきた時にそれを肯定的に唱えた。世界精神が馬に乗っていると彼は言った。歴史というのは平たく言うとある方向・目的に向かっている。その歴史を動かす力・精神が存在していて、それがナポレオンであると彼は解釈していた。ナポレオンは人類の目的を体現している存在であるととらえようとし、ナポレオン自身も神から選ばれた世界を変えるために生れてきた人間だと認識した。議会に集まってくる議員は私的な意識を体現しているにすぎないと考え、ナポレオンは議会を重要視していなかった。議会に反対されることを非常に嫌い、彼が皇帝になるとだれも反対しなくなる。そういうプロセスを得て、自分が人民であると主張し、多くの人がそれを受け入れるようになった。新しい人民主権の理論が登場し、ナポレオンはそれを人民投票によって正当化しようとした。彼は 1804 年に人民投票を実施した。要するに私が皇帝になることを認めるか否かということで、圧倒的な支持を得て彼は皇帝の座に就くことになった。人民主権のロジックに依拠して皇帝になるが、人民主権をずっと尊重するならば次のような問題が生じる。国民は皇帝になることに同意したが、気が変わった場合に人民主権のロジックを尊重するなら自らは退かなければならない。いったん公邸になると二度とノーを言わせないようにした。投票の際にその意思を世襲制にした。ナポレオンの子が皇帝を継ぐ。そのためにイメージでレジティマシーを体現しようとした。シンボルによって人々の中世、同意を調達しようとし、それを単なるロジックでなく、イメージとして焼きつけようとした。